

幼児教育史学会 会報 第35号

目次

第18回大会報告

研究発表・シンポジウム

総会報告

大会を終えて	塩崎美穂
研究発表・参加記	柴田賢一・新庄洸・長谷川真也
古沢常雄会員を偲んで	別府愛・梶瑞希子
随想・近況報告	宍戸健夫・畠山祥正・太田素子

新入会員 / 寄贈図書

機関誌編集委員会・事務局からのお知らせ

第18回大会報告

第18回大会は、2022年12月10日（土）に東洋英和女学院大学にて、三年ぶりに対面で開催されました。大会の詳細は以下の通りです。

【研究発表】

司会：勝山 吉章（福岡大学）
松島のり子（お茶の水女子大学）

1. 東京保育問題研究会における「話し合い保育」から「つたえ合い保育」への展開と乳児集団保育実践 —マカレンコの集団主義教育との関連を手掛かりに—

中塚 良子（松山東雲短期大学）

2. 絵本をめぐる発達心理学的意味づけ—1960-70年代における佐々木宏子の発達研究を手がかりに—

若林 陽子（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター特任研究員、東京大学大学院教育学研究科（院生））

3. 羽仁説子の幼児教育思想に関する一考察

相田 まり（山梨学院短期大学）

【シンポジウム】

テーマ：幼児教育史研究の成果と課題 2
—幼児教育の現代史にむけて—

提案：「戦争と復興の時代の幼児教育」
小玉 亮子（お茶の水女子大学）

「科学と交錯する幼児教育」
福元 真由美（青山学院大学）

「グローバル化と保育」
村知 稔三（青山学院大学）

コメンテーター：「幼児教育の現代史にむけて」
一見 真理子（お茶の水女子大学）

司会者：高田 文子（白梅学園大学）

【関連企画】 大会翌日12月11日（オンライン開催）

海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会（愉フォロ会）

報告：「東洋英和女学校幼稚園師範科における保姆養成教育—女性宣教師の描くキリスト教教育—」

佐藤浩代（東洋英和女学院大学）

コメント：日本の幼児教育史でキリスト教の果たした役割について考える

石神真悠子（東洋英和女学院大学）

司会：塩崎 美穂

総 会 報 告

2022年12月10日16:45開会。

議長は次回大会の実行委員長である福元理事にお引き受けいただいた。福元議長により、総会資料の次第に沿って議事が進められた。

報告事項

1. 第17回大会年度(2021.10.1~2022.9.30) 会務報告

- (1) 会員数：2022年11月末現在177名。
- (2) 第17回大会：2021年12月4日、上智大学にてオンラインで開催された。大会参加者は研究発表45名、シンポジウム48名。

2. 編集委員会報告

『幼児教育史研究』第17号、2022年11月10日付で発行。

- ・編集委員長 勝山吉章(投稿論文担当)、編集副委員長 一見真理子(書評担当)。
- ・投稿論文の総数は7本、うち1本を論文、1本を研究ノートとして掲載。
- ・その他、シンポジウム記録、書評2本、図書紹介1本を掲載。

3. 会報の発行について

第31号を3月10日、第32号を7月30日に発行、その後Web公開版をアップ。

4. 15周年記念事業について

2022年10月14日付で、下巻『幼児教育史研究の新地平—幼児教育の現代史—』が刊行された。会費納入済みの会員に送付を行った。

5. HPの移行について

株式会社SOUBUNに依頼してHPの移行作業を行っている。目的は以下のとおり。

- ・HPのサーバーの契約を委託することによって、担当者個人ではなく幼児教育史学会が契約するかたちにする。
- ・特定のソフトを使用せず、Web上でHPの更新を可能にする。

6. その他 特になし。

審議事項

1. 第17回大会年度(2021.10.1~2022.9.30) 決算

◇福元理事(会計担当)より、「第17回大会年度幼児教育史学会収支報告」資料2に基づき報告がなされ、承認された。

2. 第18回大会年度(2022.10.1~2023.9.30) 事業計画

◇浅井事務局長より、第18回大会年度事業計画について説明がなされ、承認された。

- (1) 『幼児教育史研究』第18号の編集
 - ・第18号の編集委員長、副編集委員長の選出申し合わせに従い、正副編集委員長は1年交替とする。正委員長は翌年副委員長として残り、業務の円滑な引継ぎを図る。
 - ・投稿募集その他編集規定に従う。大会記録、書評・図書紹介等の掲載内容に関しては、編集委員長に一任する。

(2) J-STAGE上での公開について

(3) 会報の発行

- ・発行時期：従来通り2月頃(第35号：第18回大会報告)、6月頃(第36号：第19回大会案内)
- ・内容：会員研究情報などの充実に努める。

(4) 第19回大会の予定

青山学院大学(東京)
大会実行委員長：福元真由美理事
日程：2023年12月上旬 土曜日(予定)

3. 第18回大会年度(2022.10.1~2023.9.30) 予算案

◇福元理事より、資料3に基づき、第18回大会年度予算案が説明され承認された。

4. その他 特になし。

大会を終えて

第18回大会実行委員長 塩崎美穂(東洋英和女学院大学)

幼児教育史学会第18回大会は、2022年12月10日、東洋英和女学院大学横浜校にて、三年ぶりに対面開催することができました。

開催準備をはじめた当初は、足の便の良い六本木校を予定しておりました。しかし、9月以降の感染症対策上、それが叶わないことになり、急遽、横浜校での開催となりました。横浜校は最寄り駅から離れており、足を運んでいただくことを躊躇する場所での開催となりましたが、それにもかかわらず、研究発表に40名、シンポジウムに42名、総会に36名の会員の方々にお集まりいただきました。対面での開催を心待ちにされていた会員の皆様の研究への熱い思いが伝わってくるような活発な議論に、心より感謝しております。

研究発表は3件あり、主に、第二次世界大戦前後における日本の幼児教育思想や実践を取り上げたものでした。20世紀前半から半ばにかけて、幼児教育学にソビエト心理学や科学というものの見方が果たした役割、生活や集団という概念の変遷が与えた影響など、今後、戦後の幼児教育史研究を進めていく上で避けることのできない重要な視点がいくつも共有されました。今回、全体討論の時間を多く取ったことで、時間に余裕があるのではないかと予想しておりましたが、勝山・松島両会員の的確な司会進行のおかげもあり、一つ一つのご発表に対して活発な質疑がなされ、次の研究につながる刺激的な討論が時間いっぱいまでなされたことが、たいへん印象的でした。

シンポジウムは前大会でなされた『幼児教育史研究の新地平』(上巻)の議論を踏まえ、下巻の検討が行われました。『幼児教育史研究の新地平—幼児教育の現代史—(下巻)』の編集・執筆を担当した小玉亮子(第1部)・福元真由美(第2部)・村知稔三(第3部)の会員からそれぞれ提案がなされ、全体の統括編集を担当した一見真理子会員から総合的なコメントがありました。グローバル化が一举にすすむ時代を幼児教育の側からどうとらえることができるのかという視点を含め、幼児教育の現代史の課題に光があてられる議論が展開され、参加者にとって、今後の研究のあらたな視角を見出す時間になったのではないのでしょうか。

研究発表とシンポジウムを通して、今大会は、戦後史、現代史について多くの議論が展開されました。いま保育の歴史研究に何が問われているのか、また研究の蓄積の中で今後どのような視角からの幼児教育史研究が求められているのか、会場全体で考える時間をもつことができたことに感謝いたします。

大会翌日の「愉フォロ会」では、佐藤浩代会員から、東洋英和女学院の幼稚園師範科においてキリスト教宣教師が果たした役割についての報告があり、石神真悠

子氏からコメントをいただきました。対面参加がかなわなかった会員にも多数ご参加いただき、盛会のうちに終えることができました。

今回は、まだ、感染対策上、懇親会を開くことはできませんでした。第19回大会は青山学院大学で開催の予定です。次回は、対面開催および懇親会も実現できることを願っております。

着任から間もない本学での大会をお引き受けしてしまい、当日までの行き届かなかった点多々ありましたことお詫び申し上げます。学会長、事務局長をはじめとする皆様のご助言を得て、なんとか終えることができました。心よりお礼申し上げます。

研究発表・参加記

幼児教育史学会 第18回大会参加記 柴田 賢一(常葉大学)

初冬の東洋英和女学院大学横浜キャンパスに足を踏み入れた時、久しぶりの対面式の学会が行われることに年甲斐もなく胸が躍った。オンラインでミーティングができるアプリが精度を上げ、学会も画面を通して行われることが当たり前になった昨今の状況ではあるが、生の声が響く会場でのやりとりを心待ちにされていた方は少なくないだろう。

午前中の自由研究発表は奇しくもソビエト、集団主義あるいは生活という共通項を持ち、20世紀の保育・幼児教育があゆんだ歴史の一部分を強く印象付けられる内容であった。

続いて開かれたシンポジウムでは、本学会から刊行された『幼児教育史研究の新地平(下)』について様々な議論が交わされた。戦後の日本の保育の歩み、刻々と変化していく保育・幼児教育の状況を、歴史的視点を踏まえて論じることができるのはこの学会の強みであり、ともすれば「今」に偏りがちな幼児教育の議論を、人間の歴史と絡めながら論じることが、保育・幼児教育全体にとって有益なはずである。一方で、上記著作の執筆者である先生方からは、現在の幼児教育の状況、保育者の養成について悲嘆とも憤りとも聞こえるような切実なご意見も聞かれたように思う。筆者も保育者養成校に勤務しているが、保育・幼児教育が世に(研究者にも?)理解されることの難しさを日々感じながら保育者養成や現職研修に関わっているところであり、学会のこの記念誌が少しでも多くの読者を得られるようにと願う。

末筆ながら、会場校として大会を開催していただき、コロナの逆風のなか対面型での学会開催というご決断をされた実行委員長の塩崎会員、学会執行部の先生方にはこの場を借りて、学会の楽しさ思い出させていただいたこと感謝申し上げます。今後、他の学会でも対面式での大会が再開されていくこととなると思われる

が、私にとってその最初が本大会であったことを、記憶に留めておきたい。

学会参加の所感

新庄 洸(関西大学・院)

私にとって、第18回幼児教育史学会は、通常開催で参加することとなったはじめての学会となりました。昨年の学会でコメントをしていただいた先生方や査読でお世話になった先生方にご挨拶できたことはもちろん、対面であるが故の学会独特の緊張感や温かさを感じる事が出来た一日となりました。また、私は日頃、家業のこども園・保育園に勤めながら博士課程に在籍しております。どうしても研究に集中する時間が絶対的に短いため、学会参加することでやる気と活力をもらっていただくことができました。第一に博士論文の執筆に注力する必要がありますが、いずれ世界の保育政策や保育者実践などの歴史に研究対象を広げていきたいと決意を新たにしました次第です。

さて、参加して気づいたことを2点ばかり記させていただきます。

まず、学会発表やシンポジウムを拝聴して、やはり幼児教育史という分野は面白いと感じました。「第二次世界大戦前夜、国家の教育への干渉が強くなる際、その干渉の射程は保育の分野にまで及び、そのコントロールに保育者や子ども、そして保護者も当然組み込まれていく・・・」という論は、特に興味をそそられました。なぜなら、私にとってこの幼児教育史というジャンルはケーススタディのようなマイクロな切り口に終始するものと思っておりましたが、マクロかつダイナミックな切り口で捉えることも可能であるということに改めて気づかされたからです。そして、このように「幼児教育史という観点から、保育を捉えるということ」は研究者としての私だけでなく、実践者としての私に重要な視座を提供してくれるようにも思います。

次に、諸先輩方の若手研究者に対しての温かい眼差しです。それは投稿論文の査読の際にも感じたことでもあります。学会発表に対しても、どうしたら研究が面白くなるか、どこに不足があるのかといったことを詳しくご指摘されていました。また、どうしても物怖じしてしまう若手研究者にも発表やコメントする機会をうまく与えてくださっているように感じました。

最後になりますが、新型コロナウイルスの感染状況が不透明ということもあり、大会企画していただいた先生方におかれましては、開催の企画・調整において、大変なご苦勞があったことだろうと推察致します。改めて深く感謝申し上げます。

新入会員としてのごあいさつ

長谷川 真也(東京大学・院)

2022年度入会の長谷川真也(まさや)です。

自分の研究の話をさせていただくと、私は学部時代からP4C(Philosophy for Children、子どものための哲学対話)にまつわる理論研究を行なってきました。初めは自分の研究が幼児にも関わるものだとは全く思っていませんでした。しかし、自分の研究の中で問われていることが子どもという存在をどう見るかに関わっており、特に年齢の低い子どもの思考についての価値に関わるものだと分かってきました。私が今着目しているガレス・マシューズという哲学者は、幼児の言葉の中にも哲学をみようとしています。そして、大人のやっている哲学という学問自体を問い直そうとします。このようなわけで、国際的な議論の中で子ども観の変遷の検討や、必ずしも理路整然はしていない言葉をどう聴くのかということを経験し、研究していく所存です。

日本の幼児教育史については、羽仁もと子、羽仁説子の教育実践についても共同研究という形で研究しています。共同研究を行う中で見つけた、園内での幼児の様子を記録した史料、幼児の芸術に触れたときはとても驚きました。もちろん、そこに描かれている幼児の活動についてもではありますが、同時に教師はどのように多大な労力をかけ記録し、70年以上保管してきたのか。教師は幼児の中にどのような価値を見出していたのか。史料として現存する、過去の教育実践や子どもの様子を分析し、教育学の議論の俎上に上げていくことは意義のあることだと感じました。

最後になり恐縮ですが、前回大会(第18回)にはオンラインで参加させていただきました。会員の方々から多くの質問が飛び交い、幼児教育史についての前提知識の乏しい私にはあまりにも高度な議論でした。が、同時に密度の濃い議論が刺激的でした。次回の学会大会ではぜひ現地で参加して、会員の方々との議論を楽しみたいと思っております。末席を汚させていただきますが、ご指導のほどよろしく願いいたします。

古沢常雄会員を偲んで

別府 愛

幼児教育史学会の前身の近代幼児教育史研究会発足の当初から会員としてまた理事としても会を支えてくださった古沢さんでした。

2021年10月31日逝去されました。6月ごろ体調を崩して診察を受けたらかなり進行した胃癌だったそうです。最期は家族の方に見守られ安らかに永眠されたそうです。

古沢さんの思い出

自宅が近いこともあって親しくさせていただいた個人的な思い出を綴らせてください。

古沢さんは狭山市在住で、私は当時、入間市に住んでいました。長男が生まれた時、古沢さんが二人の息子さんの洋服や乳母車を譲ってくださることになり、今は珍しい箱型の大きな乳母車を押して、自宅から我が家まで家族4人で持ってきてくれました。とくに乳母車は長男だけでなく次男の子育てにも大いに重宝させていただきました。

フレネ教育の幼稚園・保育園との出会い

フレネ教育に関心を持ち紹介や導入に意欲的だった古沢さんから狭山市にある「けやの森学園幼稚園・保育園」を紹介していただきました。

この園では、自然の中での活動、子どもたちの興味や関心を尊重し自主性を重んずる保育をしていて、自分たちの保育と共通するものがあるフレネ教育を知り、96年からフレネ学校の校長先生や教員を招いて交流会を持ったり、2002年にはけやの森の全職員でフランスのフレネ学校を訪れています。

何度か園を見学させていただいたり、勤務先の学生で幼児の音楽活動に関して卒論を書く学生が観察させてもらったりしました。

法政大学での非常勤

古沢さんは2011年4月に脳出血を発症、入院、リハビリを経て5月には授業再開されています。ご本人の書かれたものによると研究会やいくつもの学会にも積極的に参加されています。

12年3月、定年の1年前に法政大学を退職されました。

担当されていた「学習の社会史A(外国)」という科目を私が非常勤としてお引き受けすることになり、楽しくやらせていただきました。

私が今住んでいる所は、ソメイヨシノや八重桜など桜の花が見事です。「老夫婦二組でお花見しましょう」と約束していたのですが、お互いの体調がすぐれなかったり、そのうちコロナで外出もままならなくなったりで、実現できなかったのが心残りです。

古沢さんには長年お世話になりました。

家庭にあっては病気がちの奥さまを支え、真守君と拓末君のよき父親として家庭を大事にされた古沢さんでした。

ご冥福をお祈りします。



古沢先生のこと

梶 瑞希子

古沢先生は、フランス教育の研究者として法政大学で教鞭をとる傍らで、近代幼児教育史研究会だけでなく、たくさん学びのネットワークに参加しておられました。その広がりを実感したのは、先生の最終講義の時でした。広い会場には、これまで研究会はもとより、教育史学会その他の学会でお顔を拝見したことのない方々がたくさん集まっていました。

先生の思い出は、学生運動の集会のシュプレヒコールが響きわたる法政大学市ヶ谷キャンパス内で開催された研究会に始まります。研究会は当初、年2回のペースで開かれていました。東京以外にお住まいの会員のお世話で、高知(太田前会長にはそこで初めてお目にかかりました)や山梨、新潟、仙台、そしてソウルにまで足を伸ばしたこともあるのですが、東京での開催場所は、古沢先生にお世話いただくことがとても多かったのです。研究会は、いつも開催場所の確保に苦労していました。ですから、古沢先生のご厚意がなければ、会の存続は難しかったかもしれません。

先生はフェミニストでいらしたようにも思います。私が院生だった頃、40年以上も前のことになりますが、女性は結婚や妊娠をきっかけに職場を去るのが当たり前で、研究職の場合は定職に就くのが難しい時代でした。そのような中で、子育て中であった私を、とある勉強会に誘ってくださいました。40代半ばで就職するまで研究への意欲を持ち続けることができたのは、近代幼児教育史研究会とこの勉強会があったからです。勉強会のメンバーは定まっておらず、不定期開催で会費はなし。会場は法政大学の保養施設であったこともありますが、基本的に持ち回りでした。参加者は次第に固定され、古沢先生のほか、ソビエト、イギリス、アメリカ、日本を研究対象とする5名がそれぞれ書き溜めた論考を持ち寄って検討する会になりました。古沢先生のフランス領インドシナの教育に関する論文は、私にはわからないことだらけでした。ですが、何年後にマルグリット・デュラス著「愛人ラマン」を読み、同名の映画を見たときに、宗主国出身の貧しい家族と従属国の富豪一族、それぞれの家庭で交わされる会話の中に、植民地支配問題の根深さを感じとり、深く考えさせられたのを思い出します。

法政大学を退職された後に、「これなら梶さんにも分かるでしょ」といたずらっぽくおっしゃって、たくさんのお版入りの書籍を贈ってくださいました。フランスで出版された子ども研究や児童書の数々で、フランスから持ち帰ったとおぼしきものも少なくありません。大切に手元に置いてきましたが、私も昨年聖徳大学を離れましたので、これを活かしてもらえるところに届けたいと考えています。そうすることで、先生から受けたいご厚意に、少しでもお返しができるように感じています。先生、ありがとうございました。

随想・近況報告

私の歴史的研究を考える

宍戸 健夫

私が当面、やりたいと思っていることは、保育の先輩たちの歩みについてです。

先輩たちが、貧しい保育条件のなかで、子どもたち一人ひとりの気持ちを大事にしながらも、子どもたちの集団生活で生まれる問題を考えあい、どうしたらよいか、その解決にむかって、協力しあう関係をつくっていく実践に感動しています。

保育の研究の上で、「実証的な研究」も大事ですが、「歴史的研究」も大事だと思っています。ことわざに「木をみて森をみない」といわれますが、歴史的研究は「森」を見る事だと思います。

以前、幼児教育史学会誌『幼児教育史研究』第6号(2011年)で、「実践記録と歴史的研究 — 保育実践史研究序説」という小論を私は書いていますが、参考にさせていただければ、幸いです。

近況・最近思うこと

畠山 祥正(茨城キリスト教大学・非)

昨年4月から、学生時代を過ごした仙台の東北大学YMCA寮の理事長(世話係)となり、12月の第二土曜日はクリスマス会が恒例のため、学会への出席は難しくなりました。

コロナやウクライナを気にしているうちに、心に重いものが常駐する状態でしたが、当学会のフォローする会はZOOMだったので参加できて元気をもらいました。声でのやりとりは大事ですね。かつて学んでいたことを失念していて恥ずかしかったのですが。

この学会の会報に11,15,17号と載せていただいたのは、27年勤めた茨城キリスト教大学を2010年3月早期退職した後の時期でした。リセットのつもりでしたが、金沢、郡山、宇都宮に計8年おり、2018年4月に茨城県日立市に戻りました。同年秋から、2004年に立ち上げた保育専攻の科目「キリスト教保育」に週一日出講しています。

各地を回ってわかったのは、保育環境の地域差です。保育所の多い北陸地方には保育所不足はありません。一方幼稚園主地域では乳児を含むこども園への移行に危うさを感じました。制度的一元化は、別の問題を引き起こしているように思います。

実習巡回では、建物に保育の思想と方法が現れていることを認識しました。気づいた点を園長さんに向けて、長年温めていた構想を実現した過程や、話し合いを積み重ねた苦勞を聞かせてもらえました。もうそれはありません。

今や論文の入手はWebからが一般化し、国会図書館

のデジタルコレクションも昨年使い勝手が上がりました。でも歴史研究は史料の読み込みとその背景理解が鍵です。

引越の度に多量の本を整理し、PDF化作業にも尽力しましたが、キリスト教幼児教育史研究につながるものがしんどくなりました。

2年前から、戦時中に弾圧されたキリスト教主義学校・北星女学校について調べ始めたのですが、その後、前述の寮の古い記録や、寮でお世話になった故渡部治雄先生の図書、さらに戦後初代寮主事・故青木茂先生の史料の山を自宅に運んだため、研究は中断しました。

ところがつい最近、その中から堀江優子編著『戦時下の女子学生たち 東京女子大学に学んだ60人の体験』(2012)に出会いました。聞き取りによる一次史料です。聞き手が自分の関心範囲を越えて記録し当事者に確認しており、関連史料や理解に役立つ手引きもついています。

個人蔵の図書や文書の中に歴史的宝を探すのが楽しみです。

「家」と家族の歴史研究をめぐって

太田 素子

保育者養成と関わって研究してきたプロジェクト活動や探求学習をテーマとした二つの科研が今年度で終了する。また並行して参加してきた浅井・小玉・榊さんたちとの共同研究も今年度で一区切り。やっと退官後の研究に本格的に向き合う時期になったのかもしれない、そんな気持ちもあって年末から正月にかけて、気になりながら読めなかった2冊の本を読んだ。

一つは中谷正浩氏の『中世は核家族だったのか』。これまで中世は大家族だったというのが歴史学の通説なのだが、中谷氏は、中世においては夫婦単位の核家族が散居して集住する状態だったのだと、屋敷地に関する遺跡の発掘調査などを援用して実証的に語っている。その後、農業の集約化に伴って土地に対する定着性が高まり、土地と家族の関係が固定化することで直系小家族が形成され、近世の集住する村落への移行が始まったのだという。中世は「核家族だった」というのは、実に刺激的な議論で、久しぶりに読書でワクワク感を体験した。生活の最小単位は核家族で、農耕など労働は大家族の規模の協力関係で行っていたとしたら、とても賢い暮らし方だとも思う。その後、土地に対して水利や堆肥など努力を投下し、農業が高度になることが家族の形態や村落の形態を変えてゆくという議論の仕方も印象的であった。

ただ、中世の大家族といわれるものが散居する核家族の集合体だという指摘は興味深いのが、取り上げられている根拠が近畿以西の家族である点が、この議論の大きな特徴(もしかしたら限界)かとも思う。以前筆者がフィールドにした近世奥会津の農村では、近世前期

に下男下女の大部屋を備えた家屋構造が紹介されており、おそらく村落形成期から続いているのではないかと思うので、大きな家に住む大家族形態もあったのではないかと。中谷氏は西国と東国の差異を約1世紀という時間差で説明しているが、時間差だけで論じられないものがあるのではないかと推測している。

もう一つは、鈴木理恵編著『家と子どもの社会史—日本における後継者育成の研究』。教育史の知人の編集した本である。それはいわば筆者も含めた子育ての社会史への批判の書だった。「家」における子ども研究の視点は、子どもの養育・しつけや知的教育に偏りがちで、後継者養成に触れることはあっても断片的である。「子どもが家業を継ぐ存在であった時代には、『しつけ』や『家庭教育』に安易に回収されることのない、「家」独自の育成機能やそれを支えた親族や同族仲間の役割があったはずである。」この書は、「諸階層の「家」の後継者育成が、どのような環境、階梯、方法で行われたかという具体相を通史的、実証的に明らかにすることを目的としている」という。養育やしつけでなく、後継者育成という視点が大切だというわけだ。速読した時には筆者の引用も何箇所かあるので無視されているとは思わず、学際的に研究者を集めるという著者らしい力技で、本全体は面白く読んだ。しかし、丁寧に読んだ

ら、この批判は、子育ての社会史への誤解や無知を含んで成り立っている批判のように思われてきた。子育ての歴史研究が乳幼児期に集中する一つの理由は、(もちろん筆者が幼児教育の研究者だということもあるが、それ以上に) 近世の人々が乳幼児期を人格形成の要の時期と見て子育て論を展開していること、また親子関係の密度の変化が近代的な子育てへの子ども観の変化を反映していると見るからなのだ。家族関係を注視するのは、(私小説風の狭さではなく)「家」の性格の変化がそこに反映していると見ているからでもある。

氏がいうように、確かに「家」が後継者養成にどのような意を用いたかは重要なテーマであることは確かだが、その点に関しては実は彼女は『子宝と子返し—近世農村の家族生活と子育て』という筆者にとっては大事な著作を読んでくれていないようで、引用していない。その中には、宮負定雄という人の農家の後継者育成論である『民家要術』という本を紹介しているし、家訓の中の子育て論も紹介している。農家の後継者育成はいつも念頭にあったつもりなのだが、わかりにくい文章や本の構成だったためか、それを後継者育成という枠組みで論じなかったから伝わらないのか、いずれにしても研究を他者に伝えることは簡単なことではない、と改めて反省する機会になった。

新入会員・会員異動（2022.7.31～2023.4.11）



寄贈図書（2022.3～2023.1）

- ・幼児教育史学会監修、一見真理子・小玉亮子編『幼児教育史研究の新地平<下巻>』萌文書林、2022年10月。
- ・稲井智義『子ども福祉施設と教育思想の社会史』勁草書房、2022年11月。

機関誌編集委員会からのお知らせ

『幼児教育史研究』第18号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2023年5月1日から5月31日までに事務局宛にメールでお送りください。詳細については学会ホームページ掲載の投稿要領をご確認ください。多くの皆さまからのご投稿をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

1) 会費納入のお願い

振込用紙を第18回大会年度(2022年10月1日～2023年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方にお送りしております(2023年4月確認)。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。(シールの記載と振り込み用紙がない会員は完納状態にあります。) 本状と行き違いでご納入の場合には、何卒ご容赦ください。

年会費： 一般会員 7,000 円 特例会員(学生・退職者等) 4,000 円

送金先： 郵便振替 00190-9-73668 加入者名： 幼児教育史学会

2) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、どうぞもれなくメールにて下記の学会事務局までお知らせください。

3) 役員選挙実施のお知らせ

今年は役員選挙の実施を予定しています。また追ってご連絡いたしますので、ご協力の程お願い申し上げます。

幼児教育史学会会報 第35号 2023年4月12日

発行者 幼児教育史学会

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科 浅井幸子研究室気付
幼児教育史学会事務局 E-mail: admin@youjikyokushu.org 郵便振替 00190-9-73668

編集 塩崎美穂 印刷 木元省美堂